

## 7) 子牛導入時の処置

子牛を牧場へ受け入れる際には、まず、輸送車両で特に異常のないことを確認する。導入されてきた子牛は既存の飼養牛群とは分離された場所で一定期間飼養し、異常のないことをさらに確認する。この過程において異常が確認された場合は、獣医師の診察を受け、その指示に従う。

輸送時間、輸送環境等によるが、一般に輸送自体が子牛にとってストレスになるので、ストレスの程度により適切な処置を施す。

## 6. カーフハッチ、自動ほ乳機での飼養上の留意点.....

### 1) カーフハッチ

カーフハッチでの飼養管理技術は、酪農経営で考案された子牛の飼養形態である。カーフハッチが考案される前は、搾乳牛舎の片隅の子牛用のペンで飼養するのが一般的で、母牛に起因する細菌やバクテリアに汚染された空気がまん延した劣悪な環境で飼養されていた。

感染症の根源となる搾乳牛舎から隔離し、新鮮な外気を取り入れ、子牛間の接触感染を避ける飼養管理施設がカーフハッチである。

#### (1) カーフハッチでの飼養の利点

- ① 個体ごとの管理がしやすい
- ② ヌレ子導入が不定期、導入頭数が変動する場合でも常時対応が可能
- ③ 導入したヌレ子が感染症に侵されていても、隔離がしやすい
- ④ 建設費が安く、自家製作も可能

#### (2) カーフハッチでの飼養の問題点

- ① 感染症対策で利用ごとに設置場所を移動するため、広い設置スペースが必要
- ② 野外設置が基本のため、悪天候の場合、飼養管理者の労働がきつくなる
- ③ 飼養頭数の多い経営では、ミルクの調製から給与まで時間を要するため、特に冬季はミルクの温度管理が必要。寒冷地域ではハッチ内の水（バケツ給水）が凍るため対策が必要
- ④ ハッチごとに乾草、スターター、水の給与が必要。飼養頭数の多い経営ではほ乳専門の労働力が必要
- ⑤ 個別飼養で社会性がないため、ハッチ飼養終了後はスーパーハッチ等で徐々に群飼養へ移行させる必要がある